

出来事ファイル (No.21-7)

■神戸駅前南側地域

協議会のまちづくり対象地域西端は、ハーバーロードになっている。しかし、同道路から神戸駅まで西の方にある「きらら広場」や「D51広場」でも、いろいろな事業を展開してきた。地域全体をカバーする事業は「クリーン作戦」だろう。今後は、海岸線を走るバス停留所のほか道のあり方や地域の施策など、地域では色々な問題が議題にあがることになる。ハーバーロードから神戸駅までの地域が、これから新しい段階を迎える。



写真:きらら広場で開かれたまちかどコンサート

■「避難指示」で必ず避難！

5月20日から、避難情報が変わりました。警戒レベル1は早期注意情報、2は大雨・洪水・高潮注意報、3は災害のおそれありの高齢者等避難、4は災害のおそれ高い避難指示、となりました。これまでの避難情報では、避難指示(緊急)・避難勧告としていた指標が、「全員避難指示」ですから間違いのないよう行動してください。あなたの暮らす地域で「難」を「避」けるのはどうすればいいか。行政指定の避難場所、安全な親戚・知人宅への立ち退き避難など、あらかじめ心の準備を忘れずに。



写真:昭和13年阪神大水害時の元町商店街

■元町商店街の感染症対策レポート

兵庫県商店街連合会が、兵庫県内全商店街から感染症対策を収集し、「兵庫県商店街感染症対策レポート」としてまとめた。同誌に収録された神戸元町商店街の対応状況を見ると、感染防止対策を呼びかける横断幕の設置、配送業者へのアルコール消毒の呼びかけ、オープンカフェも設置した。5丁目の福引セールでは、くじ箱の中に直接手を入れることに抵抗があるとの声に応え、カプセルの中に入れたくじを網ですくう方法、なども紹介されている。



写真:元町通5丁目商店街福引会場

□読者プレゼント

特別企画展 「唱歌!西洋音楽がやって来た」

明治期、鉄道などとともに西洋音楽も日本にやってきました。最初に出会った西洋音楽は小学校で習う唱歌でした。それから140年を経た今、伝統的な日本の歌と思われるほど私たちの体になじんだ西洋音楽、その導入と影響を中心に紹介する展覧会です。観覧ご希望の方は、ハガキに住所・氏名・年齢を明記の上、編集部まで。先着順で5名様にペア招待券をお送りします。



梅園唱歌団 1887年(明治20年)楊洲周延 兵庫県立歴史博物館蔵(大江コレクション)

会場:兵庫県立歴史博物館 TEL 079-288-9011
期間:7月17日(土)～9月5日(日)

■エスタシオン・デ・神戸前にエレベーター

これまで動きのみられなかったハーバーロード界限で、まちづくりが動き出している。エスタシオン・デ・神戸 前では、神戸市中部建設事務所が一部の道路舗装復旧工事を行うほか、同建設局駅前魅力創造課が、弁天町交差点デッキの改良工事に取り組んでいる。改良工事は、ハーバーランド(モザイク)側にスロープを設け、元町側にはエレベーターを設置する計画。エレベーターは油圧式で、ベビーカー2台を同時に運べるサイズの予定。エレベーター設置のため、東側の車道1車線が歩道になる。交差点直前の位置にあり、車両の交通渋滞を起こさないことが前提で、あらためて交通量調査をおこない慎重に事業を進める。同付近は、エスタシオン・デ・神戸の玄関口にあたることから、結婚式の記念写真撮影に支障を来さないための配慮も必要になる。



写真:エスタシオン・デ・神戸

編集後記

元町映画館の林支配人に、映画作品に見る「まちづくり」をテーマに見る「まちづくり」をお願いしたところ、原稿執筆を承けて頂いた。元町通・栄町通・海岸通のまちづくりを目的に発足したみなと元町タウン協議会も31年目に入る。栄町通は、震災を機に金融街からマンション街に変わる。まちづくりは、新しい時代もあったが、いまでは嘘の「まちづくり」が終ったというわけではない。毎日の暮らしの中で、より美しく、便利な暮らしを求める気持ちは誰にもあるだろう。そのお手本は、身近な暮らしの中にあり、スクリーンを通して知る異国の暮らしにもある。異国には、驚くような視点も想像される。「まちづくり」のシーンは無限大、といっている。林支配人の「目」を通して拡がる、まちづくりの世界を楽しみに。

■クリーン作戦中止に

6月に予定していた栄町通クリーン作戦及び神戸駅東地区クリーン作戦は、いすれもコロナウイルスまん延防止のため緊急事態宣言発令期間中で中止になりました。

みなと元町

タウンニュース

No.
347

発行:みなと元町タウン協議会 住所:〒650-0022 神戸市中央区元町通3-13-1協和会館内 発行人:奈良山喬一 編集人:岩田照彦 電話・FAX:078-391-0831

思いがけない“元町”の姿再発見 映画『まっばだか』

元町映画館 支配人 林 未来

2010年8月、元町商店街4丁目に開館した独立系のミニシアター〈元町映画館〉支配人の林未来です。今回から、「映画からみる“街”」をテーマにコラムを書かせていただくことになりました。親しみのある街、摩訶不思議な街、異様な街…映画にはさまざまな街が登場します。そして街には人がいて、営みがあり、文化があります。ストーリーを追うだけでなく、そこから見えてくるものに目を凝らすほど映画の楽しみは広がります。その楽しみに少しでも寄与できればと思います。どうぞよろしく願いいたします。



…そんな場所を思い浮かべる人が多いのではないのでしょうか。ところが、『まっばだか』にはそんなロケーションはひとつも登場しません。それはなぜかというところ、街に求める意味が異なるからです。

例に挙げた場所は、神戸市外の人にも「ここは神戸だな」とわかる、いわゆるランドマーク(観光名所)です。観光名所は街の【ON】の部分で、それを目的に外部から多くの人が訪れます。ところが、街が内包している“営み”はその【OFF】の部分に存在しています。神戸に住んでるけど異人館に入ったことないとか、BE KOBEで写真撮ったことないという人も多いでしょう。そして神戸在住の人に「神戸らしさといえど？」と尋ねると、たとえば「海と山が近いこと」とか「坂が多いこと」とか「人がのんびりしていること」とか「おしゃれなシニアが多いこと」なんて答えが返ってきます。その人たちが思い浮かべる街の姿は、自分たちの営みのなかにあるのです。



映画が扱うテーマは数限りなくあれど、良い映画が描くものは常に“人”です。『まっばだか』も、神戸で撮った映画ですが「神戸“を”撮った映画」ではなく、「そこに暮らす“人”を撮った映画」です。神戸で撮ることが決まり、登場人物たちの息づかいが、足おとが感じられる場所を、監督らは探し歩いてロケ地として選んでいきました。

“人”を描く映画のロケ地は“営み”を感じられるかどうかと書きましたが、じゃあその人の人が住んでいる場所を撮れば良いのかというと、そういうわけでもないのが難しいところ。これは、映画はホームビデオ



ではなく、表現であり芸術であるからです。でも、だからこそ、撮影場所の選択や、その場所をどんな角度でどんな大きさでフレームにおさめるかに、監督の思いや美学、人生観までが現れてくるのです。

『まっばだか』の監督ふたりは東京在住で、神戸の土地勘があるわけではありません。そんなふたりが選んだ場所は、営みを感じられる場所でもありながら、やはりどこか「外の人」の目線であるところが神戸に住む私には(きっと、みなさんにも!)面白く感じられます。ふだん歩いて通るときは目線の高さや角度が違っていたり、よく知っている場所なのに「ここってこんなにフォトジェニックだったっけ?」と感じたり、街の持つ表情の違いを楽しめるのも映画ならではの。



海という名の本屋が消えた (92)

平野義昌

諏訪山界隈(10)

1949(昭和24)年初め、久坂葉子は家族と共に再度筋から山本通3丁目トアロードに面した邸宅(現在神戸北野ホテル(写真))に移った。8月、友人に紹介され、六甲に住む島尾敏雄(補註1)を訪ね、作品を見せた。この頃葉子はアルバイトで喫茶店に勤めていた。

〈……その小説は、アカンとされたのだが、私が、はじめて、久坂葉子なる名前を附したもので、一週間位して、第二作、「入梅」を、島尾氏のところへ持って行き、それがVIKINGにのったのだ。〉註1

同月、葉子は島尾に連れられ、同人誌「VIKING」初開催の例会に参加した。キャプテン富士正晴(補註2)ら同人と対面、焼酎を飲みながらの批評会だった。富士の葉子第一印象は「熊ん蜂」。「頭に黄色いターバンを巻いていたのか、それともドレスが黄と黒位のだんだらであったか」(註2)。

50(昭和25)年1月、葉子は島尾の勧めで、若杉慧(1903～87年、神戸で長く教師生活、戦前3度芥川賞候補)に作品を見てもらう。若杉の繋がりで「文藝首都」(文藝首都社)に送ったが、ボツになった。「VIKING」に発表すると、「作品」(作品社)編集者が目にした。その指示で葉子は何度も書き直し、「ドミノのお告げ」に改題、同年春夏号に掲載された。これが芥川賞候補(補註3)になった。葉子は驚き、入選できるものではない、と思っていた。選評では丹羽文雄のみが葉子に言及、有名人が集う日曜画家の会程度、という評価だ。葉子は受賞作に敬意を表しているが、選評には「大へん怒りを感じた」(註1)。

同年、葉子は「VIKING」に「灰色の記憶」を発表するが、同人の酷評に憤慨し、脱退する。当時の仕事は大阪の化粧品会社と放送局嘱託。富士は毎日新聞社資料部図書室臨時雇い。葉子がたびたび訪ねて、コーヒーをご馳走し雑談する。富士の給料は月5千円ほど。葉子は2社で1万3千円。葉子はデートまでの時間待ちだ。

富士は「灰色～」から、葉子の「何不自由ない家庭」の不自由を感じる。母親との距離――母乳ではなく牛乳で乳母に育てられたこと、それに両親の嘘――約束不履行である。

葉子が「灰色～」を書いたのは雑誌「作品」の原稿料不払い直後だった。不払いも契約不履行だ。恋愛でも相手に裏切られた。

葉子の恋人は放送局員の「緑の島」、既婚者だ。葉子は彼に大金を貸し、コーヒー代・タバコ代も乏しくなる。富士がタバコと100円を渡してやった。しばらくして、葉子が立派なステッキ(父親のもの)をついてやって来た。島尾の上京を見送った際、駅の階段で転び骨折した。眼をギラギラ輝かせ、カラカラと笑う。狂人のようにふるまう。

〈わたしは黙っていた。何を言っても仕方ないところに来ているなと感じた。(中略)すべての苦痛、魂の苦痛には日日(ひにち)葉というものしかないのだろう。忘却力と恢復力しか頼るものはありはしない、そうわたしは考えていた。〉註2

葉子は、小説を書けない、お金を返してもらえない、と愚痴を言う。

52(昭和27)年1月から葉子は「神戸又新日報」に「坂道」を連載していたが、終了後に新聞

廃刊。またも原稿料は入らなかった。

2月、葉子は仕事を辞める。先の恋愛は破局し、九州を旅行。3月初め、自殺未遂。睡眠薬を飲み手首を切った。二昼夜無意識の後、命をとりとめた(註3)。年譜などでは結核発症・静養とあるのだが、富士は「肺病は肺病ではなかった」と別の悲劇を示唆する。その静養中に親の目を盗み、富士を訪問し自殺の顛末を打ち明けた。4月、富士宛書簡で「VIKING」復帰を告げる。5月、現代演劇研究所創立に参加。6月、富士宛書簡(贋の恋文交換)で原稿のこと、「VIKING」のこと、富士の新同人誌「VILLON(ヴィヨン)」やラジオドラマのこと、文壇話などを陽気に語る。〈最近又、ダザイオサムちゃんが好きになりました。5月、現代演劇研究所創立に参加。6月、富士宛書簡(贋の恋文交換)で原稿のこと、「VIKING」のこと、富士の新同人誌「VILLON(ヴィヨン)」やラジオドラマのこと、文壇話などを陽気に語る。〉

最近又、ダザイオサムちゃんが好きになりました。5月、現代演劇研究所創立に参加。6月、富士宛書簡(贋の恋文交換)で原稿のこと、「VIKING」のこと、富士の新同人誌「VILLON(ヴィヨン)」やラジオドラマのこと、文壇話などを陽気に語る。〈最近又、ダザイオサムちゃんが好きになりました。5月、現代演劇研究所創立に参加。6月、富士宛書簡(贋の恋文交換)で原稿のこと、「VIKING」のこと、富士の新同人誌「VILLON(ヴィヨン)」やラジオドラマのこと、文壇話などを陽気に語る。〉

葉子の母と富士の妻がこの恋文ごっこを愛読していた。神戸での例会のたびに富士は葉子を見舞っている。

〈……久坂は新しく建て増した南向の明るい書斎を病室にして吞気そうな顔で養生していた。それは書斎というよりは、サンルームのような気がする室で、東の壁面は何段もの深い棚になっており、陶器や絵や本が並んでいた。〉註2

友人たちが集まり、サロンとなった。葉子は演劇、詩、小説と活動旺盛。10月、詩の朗読会参加。「古蘭よ」(「VIKING」42号＝7月発行、に発表)を朗読、伴奏曲を自ら作曲した。

〈いとしいむすめ／古蘭よ。／お前は海に、青い海 深い海にいる。／白磁の壺 李朝の壺と古蘭よ お前は海に。――〉註5

葉子は3人の男性――別れた「緑の島」、結婚契約書を交わした「青白き大佐」、相愛だが生活に不安のある「鉄路のほとり」――の間で揺れ動いていた。富士に会うと、ある日は陽気でにこやか、別の日はぼろぼろ涙を流す。「結婚して！ 子供は育てる！」と叫んだこともある。註2

10月、「VILLON」創刊号に「華々しき瞬間」を発表。妻ある男との恋に破れ自殺する話。

11月、エッセイを富士に渡す。島尾との出会い、「VIKING」、芥川賞候補、恋の破局、自殺未遂後の活動、執筆の苦悩などを綴った。

〈……三年半の久坂葉子の生命であった。久坂葉子の存在のおかげで得をしたのは、映画好きの私が、試写会の招待券なるものを頂戴したにすぎない。(中略)私は久坂葉子の死亡通知をこしらえ、その次に葬式をするのだ。弔文をよもう。／お前は、ほんとに馬鹿な奴だ、と。〉註1

葉子は自らの短い作家生活を「試写会の招待券」と総括、「久坂葉子を葬ろう」と決意。

12月22日、葉子は放送局の仕事の引き継ぎで「緑の島」に会う。そのあと富士を訪問し、いつもの喫茶店。

〈疲れ切っているような彼女の顔、スキイにでも出掛けそうな服装、そして短く切ってザンバラにしている髪を見てわたしは、よほっ、一体どうしたんや、これはと言った。〉註2

葉子は、黒部峡谷に行つて自殺する、と言う。旅費集めの苦労など話は混乱した。行かなければならない、家がたまらない、と繰り返す。富士は、黒部で自殺するのには許さない、と説得。師匠の詩人・竹内勝太郎(1894～1935年)が遭難死した場所だ。富士は「又。おいで。」と言って帰る。葉子は喫茶店で戯曲「鉄と布と型」を完成

させ、店に来た「鉄路のほとり」に黒部同行を懇願。彼は葉子に結婚を申し込み、今日は帰るよう促した。註2

24日、葉子は富士と「青白き大佐」を呼び出し、酒を飲んだ。葉子は彼の勧めでパーマネントをかけていて、富士は安心する。

28日、葉子は信頼する夫人を訪問し、帰りに屋台で一人酒。帰宅して小説を書きはじめる。富士は友人と忘年会。途中、葉子に電話すると、執筆中だった。最後の作品「幾度目かの最期」である。

〈……その声には暗さがみじんもなく、危機は終わったとわたしは思った。(後略)〉註2

註1 久坂葉子「久坂葉子の誕生と死亡」『久坂葉子作品集 女』(六興出版1975年)所収

註2 富士正晴「エリザベス版 久坂葉子」(『贋・久坂葉子伝』六興出版 1981年)所収

註3 「久坂葉子・年譜」(『久坂葉子研究1』同研究会1979年)所収

註4 富士正晴「贋・久坂葉子伝」縁起」(『久坂葉子研究4』同研究会 2008年)所収

註5 『久坂葉子詩集』六興出版 1979年

補註1 「島尾敏雄」 1917～86年、横浜生まれ、神戸育ち。県立神戸第一商業学校(県立星陵高校、県立神戸商業高校の前身)卒業後、長崎高商、九州帝大卒業、海軍志願。特攻艇出撃命令を待ちながら終戦、神戸に戻る。46年三島由紀夫、庄野潤三らと「光躍」創刊。47年神戸山手女子専門学校講師、神戸市立外事専門学校教授(50年神戸市立外国語大学助教授、52年退職)。ペンネーム「久坂葉子」は長州の志士「久坂玄瑞」、有島武郎「或る女」の主人公「早月葉子」から(元山手高女教諭・内藤一子「久坂葉子のこと」研究4)。

補註2 「富士正晴」1913年～87年、徳島県生まれ、神戸育ち。51年「敗走」、65年「徴用老人列伝」が芥川賞候補、64年「帝国軍隊に於ける学習・序」直木賞候補。「VIKING」は47年富士、島尾ら8人により創刊。当初はガリ版刷り。多くの作家を輩出し、現在も継続。表紙に「VIKING CLUB 神戸東京」と表記。富士の義弟・野間宏が創刊号掲載の島尾「単独旅行者」に注目。富士は島尾を文壇に出すべく尽力。初の例会で島尾は討論の模様を掲載するよう提案。ニックネーム使用、島尾はカフカ、庄野はサロイヤン、葉子はエリザベス、富士はC・O・V(キャプテン・オブ・ヴァイキング)など。入会を乗船、退会を下船と表現。同人は神戸に関わりのある者であること、有名になった者は除名、という決まりがあった。50年10月、その年芥川賞候補になった島尾と前田純敏、文芸雑誌にデビューした庄野が下船。有望新人を送り出す雰囲気。富士も対象者だが残留。富士の運営に批判者もいたし、論争して下船・乗船を繰り返す者もいて、鷹揚というか緩やか。葉子も計3度乗船。51年10月富士はキャプテンを退き、在籍のまま翌年11月「VILLON」を創刊。

補註3 受賞作は辻亮一「異邦人」、他の候補は堀田善衛(26回芥川賞)、洲之内徹(のち美術評論家)、森田幸之(井上靖の弟)、田宮虎彦(神戸諏訪山育ち)。話題は田宮(39歳)の処遇。戦前から何度も候補になり作家として地位を確立。戦後芥川賞復活にあたり、三島由紀夫を既成作家として授賞しないという方針があり、田宮を選べば三島含め対象が広がる。選考委員の坂口安吾は、自分も候補に、と言う始末。(『芥川賞全集第四巻』文藝春秋、1982年)



乙仲通界隈の魅力と可能性 乙仲さんぽ活動報告 12

公益社団法人 日本建築家協会 近畿支部 兵庫地域会
乙仲通界隈デザインワークショップ実行委員会

3年間の活動を振り返って

『乙仲通界隈の魅力と可能性』と題して、12回にわたり、私たちが取り組みました「乙仲さんぽ」について、報告させていただきました。今回は最終回になります。まずもって、このような貴重な機会を頂きましたことを、感謝申し上げます。

改めてではありますが、私たちが所属します(公社)日本建築家協会は、建築設計やまちづくりなどに取り組む専門家の集まりです。北海道から沖縄まで全国の4,000人弱の建築家が構成され、世界各国の建築家の団体から構成される国際的NGOである国際建築家連合(UiA)の日本支部となっています。各自の設計活動を通して社会に貢献するだけでなく、会員が連携し、職能を生かしてそれぞれの地域に貢献するような活動を行っています。その一環として兵庫地域会で、神戸の港町の面影が強く残るこの乙仲通りをフィールドに、3年にわたり地域・まちづくり支援事業を行いました。



『地域×学生×建築家』

今から20年ほど前、乙仲通などという名も知らない頃、私はここを訪れました。大学で建築を学ぶ私が、アルバイトしていた設計事務所が海岸ビルディングにあったからです。当時、海岸ビルディングから歩いてすぐのところに、いくつも小さくもセンスを感じる店舗が並んでいました。震災後に乙仲業者の数も少なくなり、その頃から小規模の店舗が出店をはじめたのだと、今にして思います。

大学を卒業し、少し神戸を離れていた私は、この「乙仲さんぽ」で久しぶりに乙仲を訪れ、驚きました。学生の頃は、さほど多くなかった小規模店舗が、エリア全体に広がり、一言では表現できない不思議な魅力あるまちとなりました。「乙仲さんぽ」の活動に途中から加わった私は気づいていなかったのですが、その時にすでに乙仲のまちは変わりはじめていました。経済の大きな流れから逃れて独自の魅力を創り出していた乙仲のまちに、経済の波が押し寄せ、みるみるうちに、まちの姿は変

わっていききました。乙仲の魅力を残したいという学生や建築家の想いもあり、続けてきた「乙仲さんぽ」ですが、まちづくりとしての直接的な成果はなかったかもしれません。しかし、まちづくりの支援活動としては、「地域×学生×建築家」の協働で行う支援スキームを確立できたのではないかと思います。このワークショップの手法とそのプログラムは、他のまちでの支援に活かせるだけでなく、学生たちの教育の支援にもなります。この活動に参加し、「乙仲さんぽ」がこのスキームで進められ、ごく自然にまちづくりと教育の支援になっていることの素晴らしさを強く感じました。地域の魅力や地域の人たちの声に学生たちは敏感に反応し、毎年度、すばらしい提案を見せてくれました。学生たちのまっすぐな提案は地域の人たちの心に大きく響きました。この学生たちの発想力をもっと様々なまちづくりにおいて、より実践的に活かしていけると強く感じています。商店街など地域の組織がしっかり根付いている地域では、より有効に応用が可能だと思います。

わり始めていました。それは街の発展の自然な流れであり、そのような変化は今後も続いていくと思われました。そんな変化の渦中对し、これまでの学生たちの様々な提案はより良い方向で乙仲通界隈の魅力を高めようとするものですが、取り組みを重ねるほど、実現への厳しさも見えてきました。

しかし、乙仲通界隈には、長い時間を経て培ってきた「乙仲的遺伝子」があります。それを共有できれば、建て替えや新規建設においても街の魅力を損なわないばかりか高めていくことができると感じました。その遺伝子をこれまでの活動の中から抽出し、伝えていくことが大切だとも感じています。今回の『乙仲通界隈の魅力と可能性』で少しでもその遺伝子が伝えられたのであれば、幸いです。

最後になりますが、学生たちと共に、散歩するように歩き、眺め、楽しみ、考えた乙仲のまちが、これからも魅力あるまちであり続けることを願っています。

ご愛読頂きまして、ありがとうございました。

また、これらの活動を踏まえてみてきたの

は、より多くの人々がまちづくりに関わることの重要性です。それぞれの利害関係者の意見を交えるべきであり、支援する側としても、建築家だけではなく、経済、社会学などの専門家が加われば、もっと多面的な可能性も広がると思います。

とはいえ、「乙仲さんぽ」のまちづくり支援の主役は、学生たちでした。学生にとってもこの乙仲通界隈という生きたフィールドで、地域の人や他校の学生、建築家と関わる事が出来たことは、貴重な経験であり、多くの学びが得られたと思います。

また、どこかのまちで、学生たちと散歩するように歩き、眺め、楽しみ、考えながら、まちづくり支援ができたと思います。



駒井 陽次 (こまい ようじ)
(株)Style-A 一級建築事務所 代表
／一級建築士／2020-日本建築家協会近畿支部兵庫地域会地域会長
／2017-2019年度乙仲通界隈デザインワークショップ実行委員長